

発表要旨

ポリティクスをしないことによる「自律性」 —中国雲南省昆明市回族社会のインフォーマルな宗教活動の事例から—

奈良 雅史 (筑波大学大学院)

本発表は、雲南省昆明市回族社会におけるインフォーマルな宗教活動の実践の事例から、マイノリティが（特に現代中国における「抑圧的」な）「国家権力」に対して、いかに自律性を持ちうるのかを検討することを目的とする。

1978年の「改革・解放」政策の導入により宗教政策が緩和され、中国では宗教が急速に復興してきた。こうした宗教の復興は、自律的な市民社会の萌芽だと捉えられる傾向にあった [e.g. Madsen 1998]。しかし、1990年代後半から宗教政策が再び強化されてきたことに呼応し、宗教復興を単純に市民社会の台頭と見なすことが批判され、宗教復興が国家から自律性を保とうとする宗教集団とそれを統制しようとする政治的権威とのポリティクスのなかで進展していると思なされるようになった [e.g. ワンク 2000]。

しかし、この「国家と社会」のポリティクスには、国家に対して抵抗、あるいは要求を行なう社会運動を担う人々が、その過程において、政府にエンパワーされ、国家権力を支えるエージェントになってしまうパラドックスが内在しており、必ずしもその自律性を実現するものではない [e.g. Paley 2001]。このパラドックスに陥らない実践のあり方として、ジェームズ・スコットの提示する「統治されない技法」がある。スコットは、近代以前の東南アジアの山岳地帯の山岳民族たちが、国家権力から地理的、文化的に逃れることにより、自律性を持ちえたと論ずる [Scott 2009]。

しかし、スコットによるマイノリティの自律性を巡る議論からは、山岳民族のような「逃げ場」のない現代の国民国家における生活者がいかに自律性を持ちうるのかという疑問が生じる。本発表では、この問いに答えるために、現代中国に生きる回族のインフォーマルな宗教活動を取り上げる。

調査地の中国雲南省昆明市でも、「改革・解放」以降、モスクが再建され、宗教活動が再開されるなどイスラームが復興してきた。しかし、一方で、特に宗教政策が再強化され始めた90年代後半以降、モスクなどの宗教活動の中心は、国家の宗教管理制度に組み込まれ、聖職者は政府からエンパワーされる一方で、国家の宗教・民族政策を回族に浸透させるエージェントとしても機能するようになった。こうした状況下、モスクなどの政府公認の宗教活動の場は、一般信徒にとって必ずしも自由な宗教活動を行える場所ではなくなり、特に2000年代以降、インフォーマルな宗教活動が行われるようになってきた。その一つが、本発表で中心的に取り上げる政府非公認の一般信徒によるイスラーム教育活動である。

調査地では、モスクなどの宗教の領域にまで国家権力が浸透しており、「政府のスパイ」がいると言われる。そのため、インフォーマルな活動は、行政当局から取締を受ける危険性があり、実際にたびたび規制を受ける。しかし、取締を受ける度に、その活動を担う人々は、抵抗せず、活動を一旦停止し、当局からの介入を受けにくい「空間」へと逃げていく（e.g. 支援者の会社の会議室など）。こうした活動は常に政府からの介入を受ける可能性のある脆弱なものであり、政治的に変革をもたらすものではない。しかし、だからこそ、彼らは当局から徹底的に弾圧されることなく、断続的ながらも活動を継続するが出来ていると言える。本発表では、この「国家と社会」のポリティクスに包摂されないインフォーマルな回族の実践を通じて、彼らの自律性のあり方を論じたい。

参考文献

Madsen, Richard. 1998

China's Catholics: Tragedy and Hope in an Emerging Civil Society. University of California Press.

Paley, Julia

2001. *Marketing Democracy: Power and Social Movements in Post-Dictatorship Chile*. University of California Press.

Scott, James C

2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. Yale University Press.

ワンク、デイヴィット・L

2000 「仏教復興の政治学：競合する機構と正当性」 菱田雅晴編『現代中国の構造変動 5：社会—国家との共棲関係』東京大学出版社：275-304